

ある首席室の怪事

サガ・チエトウインドは迷っていた。

机の上には、一年ぶりに開けられた薬箱と、いくつかの錠剤がある。誰にも見せたことのないその薬箱の中身は、大の男でも冷汗をかいて何とか逃れる術はないものかと足掻く代物——座薬だった。

サガ・チエトウインドは、誰も居ない首席室で、わずかに頬を赤らめつつ溜息をついた。

……これを、使わないと、無理だろうな。

ナースにやつてもらうわけでなし、それほど恥ずかしかる事でもない、とは思うのだが、一年ぶりにこの白い錠剤に直面すると矢張りなんとしても居心地が悪い。しかし、今日だけは、これから逃れるわけにはいかなかった。

やつてしまえば、一瞬のことだ。

サガ・チエトウインドは、大きく息を吸って、錠剤を一つ掴み、薬箱をまた人目につかぬ場所に仕舞って、そのままバスルームへと消えた。

そもそも、何故健康そのものであるサガ・チエトウインドがそのようなものを使う必要に迫られたかと言えば、話は一年前に遡らねばならない。

容姿端麗、成績優秀、スクール始まって以来の秀才と呼び声高い彼には、教官どころか信頼する仲間さえ口でできない秘密があつた。当時同室であつたアイオロス・エインズワースと、

所謂恋仲にだつたのだ。

アイオロス・エインズワースは、アメリカのシカゴに生まれ、十二の年までシカゴで育つた。父は弁護士、よく息子達を教育してはいたが、人生何事も経験と多少放任主義の傾向があり、お陰でアイオロスは良い事も悪い事も一通り、同年代の少年たちよりおよそ二足三足は先を行つて見聞し肥やしにしてしまつていた。そんなアイオロスにとつて、スクールに上がるまで学校に通つた事もないという貴族の箱入り息子、サガ・チエトウインドは、どんな絵でも描くことの出来る『タブラ・ラサ』であるなど、雑作もないことだつた。

ボーディング・スクールでこういった関係が発生することは稀ではないとはいえ、実際に体の関係にまで発展することは殆どない、という事実も、殆ど知識を持たぬ十六の子供が想像で事に及ぶのは危険だという事も、二人は全く知らぬまま、愛情を持ち寄る人間が到達する終着地点とも言える肉體関係へと突入していた。

サガ・チエトウインドが二人の関係を学校側に知られることを恐れ、やや引いた態度を見せ始めたとき、アイオロス・エインズワースはサガ・チエトウインドの情熱を偽りのものであると推断し、深く傷付いた。それは、サガ・チエトウインドの用心深さの現れであつて、些か覚悟も配慮も足りなかつたとはいへ必ずしも真実ではなかつたのだが、その誤解に端を發した両者間の軋轢は長く尾をひき、結局その学年が終わるまで終結す

ることはなかった。

アイオロス・エインズワースの冷たい断絶にすっかり自信を喪失したサガ・チエトウィンドは、予定より一年早く卒業を切り上げる決意をした。だが、ここに思いがけぬ事が起こった。なんと、アイオロス・エインズワースが、サガが引きこもる伯爵邸の部屋の外から、帰寮を呼びかけてきたのだ。

ほぼ一年ぶりに自分に語りかけるアイオロスの姿と、彼を慕うオーケストラの仲間達の熱意に打たれ、サガは結局最終学年である上級第六学年への復学を決めた。

アイオロス・エインズワースは、夏の間は何があつたのか、夏期休暇に入る前とは打つて変わり、サガにたいして大層親切であつた。サガ・チエトウィンドは事情が分からないながらもそれを喜び、恋人は無理でも友人としてまた良い関係が築けることを期待したが、その望みはサガが全く想像もしなかつた形で裏切られた。なんとアイオロスは、サガに再度の告白をしたのだ。

一度、手酌で振られた相手からの二度目の告白。喜んで「Yes」と言えるほど、サガは最早「白紙」ではなかつた。互いの関係が悪化してすぐにアイオロスが年上の女性と付き合ひ始めたこともサガは知つていた。その彼女と別れを告げた舌の根も乾かぬうちに、自分に告白するとはどういふ見なのか。アイオロスが急に優しくなつた理由を知らぬサガは、要はアイオロスが、とにかく体の関係を続けられる相手が欲しいだけなのだ、と結論した。元来潔癖な性格であるサガは、この不誠実な

生まれ初めて激しい怒りを覚え、所属するスミス寮の最上階で歴史に残る大痴話喧嘩をアイオロスと繰り広げた。その後、数十代にわたつて伝説となる、「ロード・パーフェクトの激昂」である。

実は真剣にサガとよりを戻すことを望んでいたアイオロスは、サガの誤解に一時は真剣に腹を立てた。が、サガより少し冷静であつた彼は、その激昂がまだ自分を想っているが故のことだと見抜いた。かくして、二週間に及ぶ一触即発の危うい均衡の後、アイオロスはサガに対し、たつた一言の殺意文句を与える。それは、アイオロスが出来れば死ぬ迄口にしたくなかつた言葉だつたが、それを敢えて口にしたアイオロスに、サガの意地の咎は脆く砕け散つた。

かくして現在、二人は豪雨降つて地固まり芽も草も花まで咲いた菜園の住人だつた。

しかし、このような波乱を経て、涙も一生思い出したくない怒りも超えてこの地に辿り着いたとの感慨が深いサガは、ひとつ、大きな誤解をしていた。

二度とアイオロスに手酌で嫌われないためには、どうしたら良いか。

アイオロスに自分の心を信じてもらうには、証を立てるしかない。その証とは、恋人でなければ絶対やらないようなことをする、ということだ。

口ではなんといつても、アイオロスが体の関係を恋人の絶対条件としている事を肌で感じていたサガは、これを乗り越えな

ければ、本当に関係が復帰したことにはならない、と思ひ詰めていたのである。

「それにしてもよお、めちやくちや傍迷惑な痴話喧嘩だったよな」

サガの居室、首席室の真下の住人であり、心霊研究会会長若いながら心霊雑誌の投稿歴だけは両手の指の数を超えるほどあるデジー・ギネスことデスがそつ呆れたように声を上げると、首席室に集つたスミス寮十級第六学年の面々は一斉に首を深く縦に振つた。

「一体何が原因だったんだよ？」

サガ・チエトウインドは困つたような微笑を寮長寮寺に向けた。「激昂」事件で自分とアイオロスがそういう関係であつたことを知られてはいても、この一年の誤解と思ひ込みによる波瀾万丈を赤裸に語ることは、彼の良識と美意識に反し到底できるものではなかつた。

一方の当事者であるアイオロス・エインズワースは、尻に帆賭けてこの居心地の悪い空間から逃げ出しはしなかつたが、それでも恋人の窮状を救うでもなく、我関せずの態度を貫いている。寮友達も心得たもので、アイオロスがこのように知らん振りを決め込んでいるときにつづいても何も面白いものは出て来ないとはかりに、懸命に紅茶など入れて仲間の気を逸らそうと見え透いた工作をしているサガをつつくことに専心していた。

ああ、ロスが一言言つてくれれば、もう少し矛先も変わりそ

うなものなだけれど。

苦情のひとつつとつに丁寧に謝りながら、サガ・チエトウインドは部屋で雑誌を捲つているアイオロスを盗み見た。

アイオロスの手元にあるのは、彼の愛読紙、ブレイ・ポリーだ。無論、そんな水着どころかオールヌードの写真の溢れる雑誌などこの部屋に常備しているわけもないので、アイオロスが自分で持つて来たものである。

つまり、最初から、アイオロスはこの会話に口を挟む気がないのであり、絶対にごちらの会話を聴いているに違いないのにまるで聴いていないふりのあのポーズは、興味津々といった態度で二人の関係を暴こうとする寮友達の手はお前に任せたとサガ・チエトウインドへの暗黙のメッセージなのだ。

まあ、ロスがこんな、明らかに「格好悪い」後始末を引き受けるとは、最初から思つていなかったけれど。

サガ・チエトウインドの口から嘆息が漏れた。

しかし、彼は、このような理不尽な役目をアイオロスから押し付けられているにもかかわらず、幸福であつた。何故なら、アイオロスが練つている雑誌、「ブレイ・ポリー」は、その昔、サガが関事の準備をしている間に、よくアイオロスが暇つぶしに捲つていたものだからだ。

つまり、アイオロスは、そういうつもりなのだろう。

矢張り、予め時間のかかる準備をしておいてよかつた、とサガは思つた。先刻使用した白いビルは、既に用をなして、あとはシャワーで綺麗に洗えばよいだけになっている。

すっかり応接室で寛いでいる仲間達に申し訳なく思いつつも、できれば早くアイオロスと二人になりたい、と思いつついたサガ・チェトウインズの希望が漸く叶えられたのは、消灯まであと二時間、といった時刻だった。実際、最上級生に消灯時間などあつて無きに等しいのだが、流石にシャワーを使つたり物音を立てる訳にはいかない。アイオロス・エインズワースは、寮友達と共に部屋を去るとみせかけて、サガの希望通り、最後に一人部屋に残つてくれた。一瞬、このままアイオロスに部屋に帰られてしまうのではないかと不安になつたサガは、そのアイオロスの行動にほつと安堵の息を漏らした。

何しろ、今日は入れ替わり立ち代わり、ひっきりなしに友人が尋ねて来て、二人でいられる時間など全くなかつたのだ。

サガは、後ろ手にドアを閉めたアイオロスに歩み寄り、自分から唇を合わせて、アイオロスの甘い口付けに酔つた。

一度アイオロスの体温を感じてしまえば、側に近づく事も出来なかつた一年のブランクはあつという間に彼方へと去り、どんなに抱き締めてもこの渴望はなくなるなだらうと思つ程、サガの胸は熱く高鳴つた。自分がこれほど情熱家だつたとは、サガ本人も知らなかつたことだつた。アイオロスは、そんなサガをあやすように、優しく髪を撫で付けている。目眩のするような幸せに酔つたサガは、この幸せを二度と壊さないようにするにはどうしたら良いのか、真剣に考えた。

矢張り、誤解のきつかけはきちんと理解しておかないと。こういう、色事を頭でなんとかしようとするあたりが、アイ

オロスが唯一サガの「欠点」に挙げる部分なのだが、そんな事はつゆ知らず、サガは一年前のアイオロスの誤解の理由を尋ねた。

元来、アイオロス・エインズワースは、自分の失敗を認めるのが嫌いな性質だ。自分の失敗を認める事が好きな人間などそもそも居ないだろうが、アイオロスは、そんな無様なことをするくらいなら、口先三寸で相手の所為にしてしまえ、と思つて、それが嫌いだった。

しかし、一年の苦い経験は、アイオロス・エインズワースを若十大人にした。間違いを認めることで、上手くゆくこともある。アイオロスは、不承不承、「サガに弄ばれた上振られたと思つたのだ」と白状した。

自分が、アイオロスを、振つた?!

サガはこの想像もしなかつたアイオロスの告白に驚き、狼狽した。

そんな事は、神に誓つて、髪の毛の先ほども考えていなかったのに!

けれど、一年前の自分の怯えようを思えば、アイオロスの勘違いもつともなものとならば思えた。なにしろ、二人部屋で扉も閉まつているのに、キスどころか抱き締め合つ事さえ、ドアの外の物音に怯えながらしか出来なかつたのだから。

サガは心からアイオロスに申し訳なく思ひ、かつての自分の消極的な態度を詫びた。照れているのか、面白くなさそうだった表情のアイオロスが、サガの髪に手を伸ばし、やさしく触れ、

額に祈りのようなキスをするに至つて、サガは絶対に、今日こそ一年間の思いをその身で伝えようと思つた。それで、自室に戻ろうとしたアイオロスに、「明日の準備をして戻つてきてくれないか」と頼んだのだ。

アイオロスの返事を聞いたあと、サガは高まる心臓の鼓動を宥めながら、シャワールームに入り、入念に今から使うつもりのところを洗い流した。

まさか、アイオロスが、サガの説教を拜聴するつもりで「戻つて来る」と約束したとはつゆしらず。

サガがバス・ルームを出て恋人の姿を探した時、アイオロスは飾り暖炉の上に立てかけられた表彰盾を手にしていた。盾には、スミス寮から輩出された歴代の首席たちの名が連なつており、それを目で追つていたのだ。来年、サガ・チェトウインドが大過なくクイーンズベリの規範生としての任を成し遂げれば、ここにサガの名が新たに刻み加えられることになる。サガは、アイオロスのじつと見ているものに気付き、自分がこれから行おうとしている行為がお世辞にも「規範生」にそぐわないものとは言えないことに居心地の悪い思いを感じたが、同時にそこに少し崩した姿勢で立つアイオロスの伸びやかな肢体の美しさに見惚れ、その罪悪感を忘れた。

決して身長低い方ではないサガより更に二インチ以上高い身長に長い手足、引き締まつた体軀、すつきりと通つて高い鼻筋、くつきりとした眉に、何より強い意志の光を宿す瞳。

二年前よりずつと大人びた面影にまばらに落ちる前髪が淡い影を作り、それが、ただ大人というだけではない、青年らしい清清しさを生んでいる。

アイオロスのことを大人っぽくて格好良い、と思つたことはあつても、まるで美しい芸術を見るような心持で見詰めたことはなかつたサガは、今発見したアイオロスの美しさに胸の鼓動を早めた。この人は、こんなに美しい人だつたか、と、改めてそう実感したのだ。

「ロスは？ シャワー、浴びる？」

早走る脈を呼吸で落ち着かせてアイオロスに呼びかけ、サガはその自分の言葉にまた幸福を噛み締める。

ロス！ 一体どれ程長い間自分は彼の事をこう呼びたかつただろう。同級生の面々が古のギリシア王の名を、または風の王の名を、短く親しみを込めてそう呼ばわる度に、それが許されない自分を思つて胸が苦しかった。始めは痛みだつたものが、徐々に冷たく小さく凝縮され、最後には闇に紛れてしまう色形にまで姿を変えた。その音が、今ようやくまた自分の許へ戻ってきた。それがたまらなく温かく嬉しい。

サガの問いかけに無言でアイオロスがバス・ルームに姿を消した時も、サガは何か考え込んでいる様子でアイオロスにごく僅かなひつかりを感じたものの、自分が初手の部分で致命的な勘違いをしているなどは全く考えなかつた。まるで新婚の新婦の如き初々しきで頬を染めながらも、サガは昔アイオロスが揃えてくれた品々を思い出しながら寝室にそれらのものを揃

えた。

大小のタオル類にティッシュ、ミネラル・ウォーター、屑箱、コンドームは所持していなかったが、自分の体では妊娠する可能性はないのだから無くては大丈夫だろう、と心を宥める。シートを取替え、丁寧にベッド・メイキングを済ませる。何もする事がなくなり、じつとベッドの端に腰掛けてアイオロスを待つ間、どうしても次第に怠くなる鼓動を何度も深呼吸して宥める。おそらく十五分ほどしただろうか、微かに響いていた水音が止まり、やがて扉の開く音がしてアイオロスが現れた。

ふと、アイオロスの影に奇妙な違和感をサガは感じた。しかし、それを言葉として認識する前に、サガの足はアイオロスへと向かい、そんなサガを受け止めたアイオロスは、サガの腕を軽く掴んで「話がある」と言った。

アイオロスは、事に及ぶ前に真面目な話をするのは嫌いなタイプではなかったらうか？

サガはその真面目なアイオロスの表情と言葉にそんな疑問を抱いたが、アイオロスに促されるまま、清潔にセットしたベッドに腰を下ろした。どんな話があるのだろうか？ 曇りのない澄んだ瞳でサガはアイオロスを見上げた。

ところが、その横に、少し距離を置いてアイオロスも腰掛けるに至って、サガは漸く何かがおかしいと明確に肌で感じた。アイオロスの取った距離は、親しい友人同士が作る礼儀正しい、きわめて模範的な距離だったからだ。

自分がここまで露骨にそのつもりであることを見せているの

に、それをからかうことすらしないで、距離を置くなどということがあるだろうか？

じわじわと心の表層に小さな徒波が騒ぎ立ち始める。サガが驚きを隠さずアイオロスの顔に視線を合わせると、アイオロスは酷く真面目な表情でチラリとサガが用意した品々に一瞥をくれ、僅かに言いよびながら言葉を発した。

「この一年は……悪かったと思ってる。お前を傷つけた、という事は重々承知しているし、お前だけを責める態度を取つたら、お前が『じゃあ今度は自分はどうすればいいんだろう』と答えを探してくれているのも分かってる。だが、お前が、そうやって生贖みたいに自分を俺に差し出す必要は無い」

サガは、アイオロスの言葉が分からなかった。瞬きを一度し、なおも恋人の顔を熱心に見詰めていると、焦茶色のしつかりとした眉がぐいっと寄って、アイオロスの顔がはつきりと渋いものに変わった。

「だから、焦って何も今日直ぐに俺に抱かれようとしなくてもいい、つて言っているんだ」

アイオロスのきつぱりとした物言いに、サガは暫し絶句した。そして、徐々に自分がとんでもない勘違いをしていたのだと悟り、顔に火を感じた。

「ロス、……その……」

今自分の頭が認識した事を、とても一息には言えなくて、サガは痞え痞え言葉を発する。

「……君には、今、……その気は、ないのか？」

自分だけがこんなに浮かれて。ロスは全然、そんなつもりではなかったのに。

最後の言葉は、息の音に声隠れてしまうほど細かった。顔に上った血の血流で、頭蓋に痛みを感じる。自分だけが相手を欲して、相手にその気がない、ということがどれほど羞恥を煽られ傷付くことであるかを、サガは身をもって知った。

サガのそんな様子に、アイオロスはタオルで水気を拭つただけの頭をざりざりとひっかき回した。

「そういう事を言ってるんじゃない。お前が『自分が悪かったから』、と思い込んでるから、そういうのは必要ないと言ってるんだ」

「そんなことは、思っていないよ……いや、確かに私が悪かったとは、思っているけど……でも、だからって、無理をしているわけじゃ……」

微妙にサガの質問の意図から外れたアイオロスの返答に、サガは細い糸のような可能性を見て反論した。もし本当にそれが理由なら、「無理などしていない」と分かつてもらえれば済む事だ、と思つたからだ。

しかし、アイオロスの声はサガの願いをバツサリと払い落とした。

「じゃあ別に焦る必要は無いだろう？」

「そうだけれど……」

いよいよ旗色の悪くなつてきた会話に、サガは、数十分前に一度は部屋を出る素振りを見せながら振り返り互いが交換した

キスを思つて唇を一度強く引き結んだ。

あんなキスをしておいて、その気になつてないのか、と詰め寄られたかつた。しかし、言葉に出来たのは全く違う内容のものでかつた。

「……君には、私が、焦つてると見えるのか？」

アイオロスは、サガのセックスに対する勢いが目に見えて削がれた事に少し息をついた。

実際のところ、アイオロスは、首席室に戻り聞こえてきたシャワーの水音で始めてサガの意図を察し、同時にサガの裸体を女の体として扱うのは無理だと突如悟つたのだ。

アイオロスの記憶に残っているセックスの為の体とは、柔らかい二つの乳房と丸い肩、張り出した尻と自分の腕の中にすっぽり囲ってしまふような形の生き物だつた。

一年前、否、二年前、サガの体を一体どんな風に愛しく感じていたのか、その記憶が皆目体に響いてこない。ざりとて、据え膳よろしく自分に体を差し出してくる者に、勃起しないなど口が裂けても言えない男のアイオロスは、巧妙にサガの気持ちを通回路に誘い込もうとしていた。

先走つた気持ちを恥じているようなサガの様子に、止めを刺すようにアイオロスはもつともらしく良識を口にした。

「つい一時間前までこの部屋に居た連中が、なんで集まつたか分かるか？ 全員が全員好意でつてわけじゃないと思うがな、俺は」

サガは、それまで尻窄まる声と共に俯いてしまつた顔をバツ



と上げてアイオロスを見た。

「……人の心は、わからないよ。でも、特に悪意を向けられたわけではない以上、私は、疑いたくない」

アイオロスは、色事ではなく現実に向き始めたサガの意識に自らの手腕がうまく働いている事を確信しつつ、わざと溜息をついて答えた。

「好意じゃなければ悪意、と言ってるんじゃない。興味だつて十分な理由だ。そういう人間が居る中で、わざわざやる必要がある事なのかつて言ってるんだ」

サガの思考がふと何かを感じて止まった。アイオロスをじつと見詰めたが、もう一度頭の中でアイオロスの言葉を反芻する。

「やる必要がある事なのか」

この言葉が、やわらかくあたたかだつたサガの心に傷をつけた。サガは、強張る面を意識しながらも、声を押し出した。

「……ロス。……昔の君は、やる必要があるかどうかなんて、気にしてはいなかったよ」

アイオロスの琥珀色の双眸が、サガの氣迫を押し返すように強さを増した。

「昔と今とじゃ状況が違う。昔は周囲に隠していて、知っている人間といたら、まああのアンドリューかシユアあたりだつただらう。だが、今はどうだ？ エサを待つてる奴らの前にわざわざ望んでる菓子を振りまく事はない」

これでは、昔、自分がアイオロスに言っていた事と同じだ

……

サガは湧き上がった苦さと悔しさに、知らずバスロープの袂を握り締めた。

「周囲なんて関係ない、何が一番大切なんだ、と私に選択を迫つたのは君じゃないか……！」

「あの時は、周りちゃんと隠しておせているにも関わらず、お前がまだ具体的にもなつていない「周囲」に怯えていたからだろう！ だが今は違う。その状況の違いが見えていないでハイリスクを犯すのは考えなしたと言っているんだ」

ピシヤリと言いつつアイオロスの言葉に、サガはキリッと歯を食いしばった。

「ここは、首席留置室で、既に消灯時間も過ぎた。あのころのように、監督生の影に怯える必要はない。ハウス・マスターの部屋からも遠い。……それで、君は一体、何に怯えているんだ？ ……君は……」

サガは俯き、一度言葉を切った。言葉にするのは、自分自身でも怖かった。それでも、うやむやにするわけにはいかない、その一心で恐怖を言葉にしてその形をアイオロスの目の前に付き付けた。

「……本当は、もう、私をそういう風には見ていない。そうだろう？」

アイオロスは、本心を見透かされた者が感じる一種独特の鈍い怒りと羞恥の衝撃を肩に感じ、次の瞬間にはその衝撃を否定した。そして、意識をサガの一日思いつめるところとこん頑固な

性質にだけ向けた。

「怯えているわけじゃない。冷静に状況を見ているだけだ。監督生が見回りに来ることは無いかも知れないが、この壁の向こうでは、シユラが寝ているぞ?」

サガの注意を壁の向こうへ促すべく、ゆつくりと発音する。

すると、それに真つ向から立ち向かうべくサガは、ひたと視線をアイオロスの目に結んで言った。

「シユラが、わざわざ親切に、校則違反を止めに来てくれるとは、私には思えないよ。」

言外に、サガは校則違反を犯す気概を自らは持つ事を示し、今のアイオロスにはそれが無いことを指摘した。アイオロスは、明らかにむつとした表情を浮かべた。

「それで? そこまでやりたいっていうんなら聞かすが、自分の体がどうやったらセックス出来るのか本当にお前は分かっているのか? お前はいつも俺がお膳立てした所に流されてただけだが……」

「君が使っていたものなら、この部屋にあるよ。ローションはないから、バス・オイルを使うしかないけれど……」

サガは、アイオロスの言葉を鋭く遮った。しかし、その勢いは、潤滑剤の事を口にするに至り再度細くなつた。そんなサガの変化を見落とさず、アイオロスは目を細めて、二人並んでベッドに腰掛けてから始めて、サガの顔に自分の顔を寄せた。

「へえええ、バス・オイルで出来ると思うの? それつてどれだけの量があるんだよ?」

この一年、もう思い出したくもない程受けて来たアイオロスの冷たく意地の悪い言葉の響きに、サガは軽くパニックに陥つた。怒ればいいのか、泣けばいいのか分からない。それでも、深く根付いた矜持と自分を支えてきた負けん気を奮い立たせて言葉を投げ返した。

「シャワールームにある。二オンスの瓶だ。持つてこようか?」

「へえ? その程度で解れてくれるんだ?」

「これ以上痔も無い棘で刺されれば、涙腺が決壊する。サガはきつい眼差してアイオロスを見詰め返しながらそう思った。

睨み付けてくるサガの視線の厳しさに、サガが完全に意固地になつて居る事、そして自分の意図したように状況を操作出来なかつた事実を突きつけられたアイオロスは苛立った。彼は無言で乱暴にベッドから立ち上がり、バス・ルームからサガの指したバス・オイルを掴み出す。

小さな、正方形に近いまろやかな丸みのある小瓶の中で、とろりとした金色の重い液体が揺れた。中のオイルは既に三分の一ほど減つて居る。「AROMATHERAPY ASSOCIATES」とロゴが入つた小瓶を手に、アイオロスは舌打ちしたい気分だった。これっぽちのオイルでどうしろというのだ、と。

一方のサガは、突然床を蹴るように立ち上がり、荒々しくバス・ルームに消え、リビングの明かりを落とし、寝室に大きなスライドで近付いて来るアイオロスを見るにつけ、その一足ごとに、痛みを伴う不安で心が潰れそうになつた。ベッドに腰掛

けたままの体が動かない。

アイオロスの足が、寢室に戻った。彼の腕が伸び、寢室の明かりが消えた。突然の暗闇に目が慣れず、ただ漆黒ばかりの視界に唇が震えそうになる。入り口付近で、柔らかい布が床に落ちる音がした。そして、硬いジツパールの引き下ろされる音。先より重い布が空気を孕み落ちる音。そして、ベッドに近づく人の気配。

アイオロスは、自分と体を繋ぐために服を脱ぎ捨て、歩いてくる。けれど、本当は彼にはもう自分の体を愛する事は出来ないのではないか？ はつきりと胸の中に浮かび上がった疑問に、サガはもう一度きつく唇を引き結んだ。

そうする事が出来ないのなら、それならもういつそ今日はつきりしてしまつた方がいい。

アイオロスは、それでもきつと友人の中では特別に近いところで、自分の事を好きでいてくれるだろう。そして、きつと、大学に入つたら、新しい美しい女性と恋に落ちるだろう。

それでも、今は、まだ、アイオロスは自分のものだ。

覆いかぶさってきた黒い影に、サガは手を伸ばし、アイオロスの首を探つた。そして、唇でアイオロスの唇を探し当て、押し当て、舌を誘つた。

懐かしいアイオロスの髪感触、頭の形。何もかもがいとおしく、切なく、その気持ち忘れようと、必死にアイオロスの顔にキスの雨を降らす。

目、鼻、頬。全てが、宝物のように大事で、掛け替えが無い。

アイオロスは、サガの熱心な接吻による愛撫が施されている間、片手で開けたバス・オイルのキャップを床に転がし、サガの接吻の役割を果たす部位に直接ボトルの口を押し付けた。サガの咽が詰まつた。息が止まり、体が跳ね上がるようにして凍んだ。

サガの緊張は、もちろんアイオロスにも伝わつたが、アイオロスはそれを綺麗に無視して見せた。自らの思い通りに大人しく諦めず、自分の隠そうとした核心に触れて来たサガに、彼は苛立つていた。

やはり自分の愛する人間はこの男だと覚悟を決め、再び手に入れたその日に、欲したはずの人間の肉体に抱いた微かな嫌悪感、アイオロスにとつて予想もしなかつた結果であり、その誤算はアイオロスを混乱させた。そして、サガの情熱が更にアイオロスを袋小路に追い込んだ。

「お前がやりたいって言ったんだ。今さら逃げ腰になるな」

硬質な、感情の見えない声がサガの上に冷たく降つた。アイオロスの左手がサガの右膝の裏に差し込まれ、持ち上げられ、そのままシャツに向かって力が込められる。半分宙に浮かぶ形になったサガの腰の中央に、アイオロスの右手はあてがつていたボトルの口先を浅く押し付けて、中身をサガの体に浸透させようと緩くボトルを降つた。

甘さの欠片もない展開に、サガの体は完全空気に縮み上がった。醜薄なアイオロスの言葉に怒りを覚えるより、サガは恐怖で凍む自分の体に絶望した。受け容れられなかつた一年前の自分の